

きゅう せつ き じ だい

1. 旧石器時代

はじめに：旧石器時代の自然や人の暮らし

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



今のサハリン北部(ロシア)。約2万年前の十勝はこんなようだったのだろう。(写真:北澤 実氏)



海面が下がり、北海道は大陸からのびる半島の先だった。(『北海道の自然史』より、改変)

水量の少ない川

陸続きとなっていたシベリアから北海道へは、マンモスやバイソン(野牛)などがわたってきていました。

日高山脈には氷河がありましたが、平地には雪がほとんど降らず、山から流れ出す川は、氷河がとける夏の間しか水量がなかったといえます。

この季節には、海からのぼってきたサケやマスで川がいっぱいになりました。

今から2万4千年前には、十勝で人が暮らしていました。「旧石器時代」にあたります。

旧石器時代とは、「石器(石を割るなどして作った道具)」を使い、一方で、「土器(粘土を焼いて作った器)」を使わない時代です。十勝の旧石器時代は、1万年以上続きます。

この時代は、「最終氷期(およそ8万年前から始まり1万年前ころに終わるとも寒い時期)」の最中でした。

とくに、寒さが最もきびしかったおよそ2万年前の十勝は、年平均気温が今よりも6~9 くらい低かったといわれています。(p52)

このころの十勝平野は、グイマツ(カラマツの仲間)やハイマツの林がまばらにある草原でした。(p62)

大陸とつながっていた北海道

氷期は、陸上の水が1年中こおっている「氷河」が広がる時期です。2万年前ころには、日高山脈にも氷河がありました(p52)。

また、水が陸上でたくさんこおって海に流れこむ量が減るため、海水が減り海面が低くなります。海面が低くなると、海底だったところが陸になります。

そのため、少なくともおよそ7万年前からおよそ1万2千年前までの間、北海道はサハリンと、さらにシベリア大陸と陸続きになっていました(p62)。



写真はアメリカバイソン(おびひろ動物園)。約2万年前にはバイソンの仲間が北海道にもすんでいた。

1 最終氷期(さいしゅうひょうき): 氷期とは、現在より寒い気候が続く中緯度(ちゅういど)の非山岳地帯(ひさんがくちたい)に氷床(ひょうしょう: 5万km²以上の氷河)がある時期。氷期は過去に何度もあり、最近(約8万~1万年前)のものを最終氷

期という。(p52)

2 グイマツ: 今では、北海道には生育しておらず、北緯50°以北のサハリン、千島列島、シベリアに生育している。

シベリアから来た人々

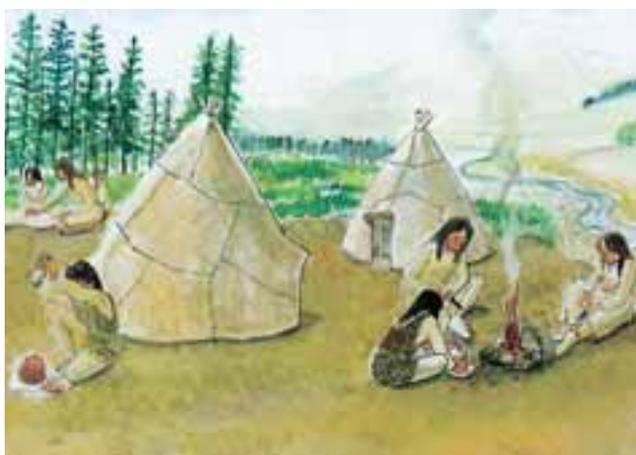
旧石器時代に十勝で暮らしていた人たちは、陸続きのシベリアからやってきたと考えられています。彼らは、シベリアのあまりの寒さからにげるために、移ってきたようです。

人々は、石器や骨角器（動物の骨や角で作った道具）などを使って、いろいろな種類の動物をとって暮らしていました。マンモスをとることもあったかも知れません。

動物たちはエサを求めて移動します。人々も、動物の群れを追って移動しながら生活していました。



ひょっとすると、このようにマンモスを沼に追いこむ狩りをしていたのかも知れない。帯広百年記念館の大型模型。



移動する暮らしのため、家はテントのようなものだった。
(想像図：帯広百年記念館蔵)

「キャンプ」での生活

移動しながらの暮らしであったため、旧石器時代の家は持ち運びができて組み立てやすい、テントのようなものでした。いわば「キャンプ」生活だったのです。

キャンプ地としては、段丘のふちや古砂丘（ p60）の上といった、川が近くを流れる高台が選ばれました。

当時は川が重要な「道」でした（その後もずっと、今から百年くらい前まで： p126、p175）。そして高台であれば、見晴らしがよく、えものである動物たちの動きがよくわかります。

また、こうした場所は水はけもよい場所であり、便利で快適な場所をキャンプ地として選んでいたのです。

大きな災害もあった

およそ1万8千年前のある日、十勝平野の中部から日高山脈の方を見上げた人がつぶやきました。

「何だ、あの黒い雲は」

黒い雲は空をおおい、やがて白っぽい砂が降り始め、あたりは、けむりが立ちこめたようになり、見通しが利かなくなりました（ここまでは空想です）。

支笏湖の北にある恵庭岳（千歳市）が大噴火を起こし、空高くふき上がった火山灰が西風（偏西風）に乗って、飛ばされてきたのでした（ p58）。

とくに寒く乾燥していた時期だったため、草木がなかなか生えません。芽室や帯広など十勝平野の中部には、数千年の間、砂漠が広がりました（ p58）。当時の人にとって、とても大きな「災害」でした。



帯広空港A遺跡（とちか帯広空港の南はし）で見られた約1万8千年前の恵庭火山灰。白っぽい中に黒いつぶ（鉱物）が混じるため「ごま塩」ともよばれる。

3 ハイマツ：今では、北海道では、主におよそ1,000m以上の高山に生育している。ただし、条件によってはもっと標高の低い場所にも生育する場合がある。
4 マンモスやバイソン：最終氷期には、マンモスやバイソン、ケサイ、トナカイ、オオ

ツノシカ、ヘラジカなどがシベリア地方に生きていて「マンモス動物群」といわれる。北海道内で見つかっている最終氷期の化石には、マンモスとオオツノシカがある（ p62）。

はものさいてきとがちいし せつき こくようせき¹
刃物に最適「十勝石」... 石器の材料「黒曜石」

十勝の石器の素材としては、「黒曜石」という石が最もよく使われます。いわゆる「十勝石」です。

この黒曜石は、火山活動でできたガラス質の石です（p33）。割ってできるうすい破へんがととてもすどく、加工もしやすいため、刃物を作るのにとでも便利です。

ただ、どこにでもあるわけではなく、十勝では十勝三股周辺（上土幌町）がおもな産地です。そこから川で運ばれるため、音更川・土幌川・居辺川・芽登川・美里別川などでは、河原の石として手に入れることもできます。

また、白滝（遠軽町）や置戸、赤井川の黒曜石で作られた石器が十勝で使われ、十勝産黒曜石の石器が道南の知内町にまで伝わっていました。旧石器時代にも、十勝と北海道内各地との間に広く交流があったのです。

この黒曜石の石器は、旧石器時代に続く「縄文時代」や「続縄文時代」にも作られ、使われ続けます。

（縄文時代 p84、続縄文時代 p100）



● 北海道内のおもな黒曜石産地。



黒曜石(十勝石)。



割った黒曜石。

せつき ぎじゅつかくしん きゅうせつきじだい
石器にも「技術革新」がある ... 3つに分かれる十勝の旧石器時代

十勝の旧石器時代は、使われる石器の種類によって、おおよそ3つに分けることができます。

まず、2万年前より前の、形が整っていない小型の石器が作られていた、最も古い時期（p76）。

それから、およそ2万年前以降の「細石刃」という石器がたくさん作られる時期。細石刃は、はばが数mm～1cmくらい、長さが数cmのカッターナイフの刃のような形をしています。骨や木のじく^こに何個もうめこんで、やり先などに使います（p78）。

その次が1万3千年前ころよりあと、細石刃が作

られなくなり、一方で、「有舌尖頭器（p80）」というやり先の石器などが使われるようになる時期です。

旧石器時代の中でも、だんだんと効率的に、また目的に合った石器を作る技術が生み出されているのです。その技術がよその場所に伝えられて広がり、さらに工夫されて新しい技術が生まれる... というように、「技術革新」と「情報伝達」がくり返されていきました。

はくへん²
形が整っていない剥片石器
 (2万4千年以上前)



さいせきじん³
細石刃という、小さな石器
 (約1万6千年前)



ゆうぜつせんとうき³
有舌尖頭器という、やり先の石器
 (約1万3千年前)



旧石器時代の石器は、時期によって変わっていく。

(石器・左右の写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：3)

1 黒曜石(こくようせき)：黒曜石の産地は、全国では大小約260カ所ある(『十勝の黒曜石』より)。蛍光X線分析(けいこうエックスせんぶんせき)という方法で、産地を推定することができる。

2 剥片(はくへん)：はがして作ったかけら。

3 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいざうぶんかざいセンター)：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

黒曜石の作り方 ... 力だけではうまくできない

きけんなので注意

黒曜石は「火山ガラス⁴ (p33)」のひとつで、割ったかけらのふちがすどく、とてもよく切れる刃物になります。油断するとかたんに手や指を切ってしまいます。

また、飛びちる破へんが細かい上にこれもするどいので、目に入ると大変です。石器作りは、注意しておこなしましょう。

黒曜石を割る時は、長そで・長ズボンにぼうしをかぶり、手には革手ぶくろ、目には保護メガネ(草かり用のゴーグルなど)をつけた方が安全に作業できます。マスクや作業用エプロンをつけると、より安全です。



石器作りのようす。あぶないので真剣に、右写真のように革手ぶくろやゴーグルをつけるとより安全にできる。

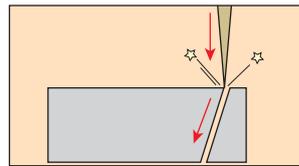
(左写真:北澤実氏、右写真:(財)十勝エコロジーパーク財団)

できれば「シカの角⁵」を用意

手ごろな石やかなづちをハンマーにして割ってもいいのですが、シカなどの角や骨の方が、たたいた力がゆるやかにおくまでとどくので、長い剥片(かけら)ができます。

力はななめに伝わる

石に伝わった力はななめに伝わります。ですから、入れたい割れ目に対して、ななめに力をあたえます。



まっすぐたたくと、ななめに割れる。

石を分割する・かけらを作る・形を整える

石器の作り方には、段階によっていくつかの方法があります。

まず、大きな原石は分割します。地面のもっと大きな石の上に置き、別の石を使って割ります。

続いて、分割したもものから「かけら」を作ります。手で持ったり足でおさえたりして、石や角などの「ハンマー」でたたきます。角などをあてて別のハンマーでたたくと、正確に力を伝えられます。

さらに細かくていねいに細工するときには、角などをおしつけてこじり、はがすようにします。

肉を切ってみる

石器ができたら、肉を切ってみましょう。石器が思いどおりの形にできていなくても、その切れ味はおどろくほです。

ただし、細かい破へんがついていると切った肉を食べられなくなってしまうので、よく落としてから使しましょう。

くどいようですが、油断すると、かなりのケガをします。緊張して使ってください。



シカ角のハンマーなどの道具で石器作り。右はシカの角。



石器作り。大きな原石を分割。ハンマーでたたいたり、あててたたいて、かけらを作る。こじって細工する。

(参考『日本人はるかな旅展のウェブページ』、改変)



石器で肉を切る。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

4 火山ガラス(かざんガラス): マグマが地上に出て急激に冷やされることなどによって、鉱物(こうぶつ)の結晶(けっしょう)を作らずに固まったものを火山ガラスという。

5 シカの角(シカのつ): 中でも春先に自然に落ちた「落角(らっかく・おちづの)」が固いのでハンマーとして向いている。

日高山脈に「氷河」があったころの暮らし



発掘中の若葉の森遺跡(帯広市)とそのむこうに見える帯広市街地。かつては、この市街地のあるところが、十勝川の氾濫原だった。

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)

2万4千年以上前、今の若葉小学校(帯広市)の南にある丘の上で、人が暮らしていました(若葉の森遺跡)。当時のがけの下には、十勝川に流れこむ小川が流れていました。ここから、ずっと北の芽室町西土狩のあたりまで、大小の川が流れる平地(氾濫原: p46)でした。川の水量は少なかったようですが、たまにある大洪水では、がけの下まで「湖」のように水がたまりました。今よりずっと寒いころ(氷期)で、日高山脈には氷河がありました(p52)。

きびしい自然の中、当時の人はヤリを持って動物の群れを追いながら、たくましく生きていました。石器の材料である黒曜石は、十勝川をわたって音更川下流の河原でひろってきました。

ベースキャンプ

旧石器時代の暮らしは、キャンプ生活です。キャンプの中には、比較的長くとどまって狩りの準備をする「ベースキャンプ」があります。

およそ2万1千年前、稲田小学校(帯広市)の南側は、このベースキャンプだったようです(川西C遺跡: p82)。

ここには、「石刃」という細長くてうすい石器がたくさん持ちこまれ、これを加工して新たな石器が作られていました。大きな石(最大3kg)のかたほうに刃を作った「礫器」も作られています。(石刃写真 p92)

そのほか、赤や黒の「顔料(絵の具)」が使われ、たき火もおこなわれていました。

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)



(上)川西C遺跡(帯広市)での発掘(平成9年)。右後ろは稲田小。



川西C遺跡で見つかった礫器(左)と顔料のもと(右)。



丘の上で石むし料理

芽室高校がある丘のへり(大成遺跡:芽室町)や、とかち帯広空港近くの上似平(上似平遺跡:おびひろし帯広市)では、およそ2万年前に「石むし料理」がおこなわれていました。

石むし料理は、食材を葉っぱなどで包み、焼いた石(焼き石)を使って熱する調理法です。

焼き石を使うと、じっくり時間をかけて熱を伝えることができます。食材の中まで火を通すことができる、とてもすぐれたやり方です。



上似平遺跡の石むし料理のあと。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)



石むし料理。石の上で火をたき、火を消したあと上に葉っぱをしいて食材をのせ、さらに葉っぱや土(ここではブルーシート)をかぶせる。

(写真 ~ :平成16年の「水がきジャンボリー」)

1 焼き石(やきいし): 焼き石は熱をゆっくりと放つので、現在でも料理に利用される。焼き石による石焼きイモは、ベータアミラーゼが活発に働く温度を保つことによって、独特な甘みを出すことができる。韓国料理の石焼きピビンバは、どんぶりが焼き石とな

っている。新潟県の佐渡(さど)ではアユの石焼きが名物料理となっており、同じく新潟県の粟島(あわじま)では、「わっぱ」とよばれる木製のおけに水と具を入れ、そこに焼き石を入れて煮立たせる「わっぱ煮」という名物料理がある。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

十勝で最も古い遺跡... 若葉の森遺跡

「若葉の森遺跡」は、今（平成19年）のところ、十勝で（そして北海道で）最も古い遺跡で、2万4千年前より古いことがわかっています。

若葉の森遺跡の発掘で見つかった石器は、帯広市の「帯広百年記念館埋蔵文化財センター（西23条南4丁目）」で見ることができます。

まだ、発掘されず地下にねむっている部分も広く残っています。

このほか、およそ2万年前の古い遺跡としては、嶋木遺跡（上士幌町）や共栄3遺跡（清水町）、勢雄遺跡（更別村）などがあります。

これら古い遺跡は、およそ1万8千年前に降った恵庭岳の火山灰（p58）より、下の地層から見つかっています。

若葉の森遺跡の地層、恵庭火山灰（白線内）の下から石器が見つかった（矢印）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）



若葉の森遺跡（帯広市）の発掘。平成14年（2002）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）



若葉の森遺跡の位置。帯広市西17条南6丁目。

見つかった石器を組み合わせると... 観察のポイント



石器作りのようす（再現）。



バラバラの石器を組み上げる。左上が組み上がった形。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

バラバラの石器を復元する

遺跡では石器が見つかったら、その位置やようすを細かく記録します。そして、石の「顔つき」を見ながら、パズルのように組み立てていきます。すると、どのように割って作られたのか、どんな大きさの石を使ったのか、どのくらい広がっていたのか、といったことがわかってくるのです。

大きさは9cmくらいの石

組み上がった石は、大きくてもおとなのにぎりこぶしくらいでした。河原にはもっと大きな石もあるのですが、これくらいの石がよく使われています。この石を、パカッと半分に分けたあと、ひたすらたたいて割っていたようです。

ないところが大切

組み合わせても、完全に一個の石にはならず、ところどころ、ぬけていました。ひたすらたたいて割ったあと、いいところを取り出して使ったのでしょう。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

カッターナイフのような替え刃式石器 ... 細石刃¹

国際理解

第1章 十勝の平野が
川ができるまで

第2章 先史時代と川

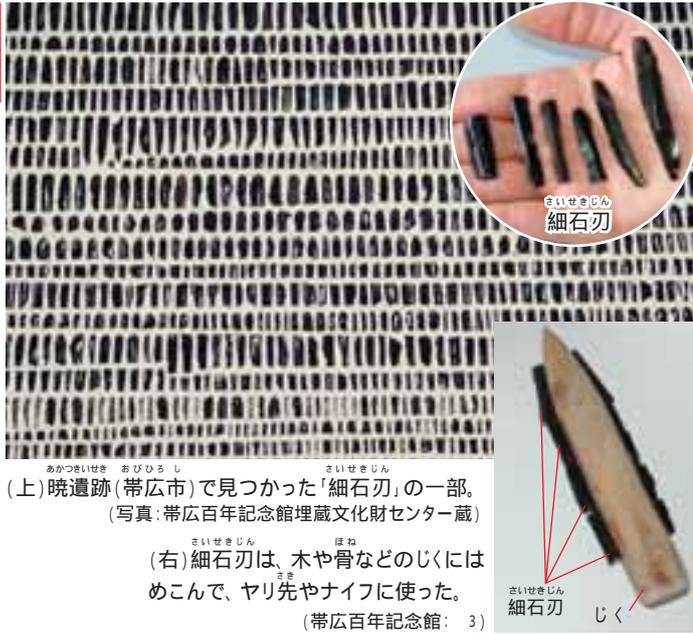
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展
そして未来へ

用語

さくいん



(上) 暁遺跡(帯広市)で見つかった「細石刃」の一部。
(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

(右) 細石刃は、木や骨などのじくにはめこんで、ヤリ先やナイフに使った。
(帯広百年記念館: 3)

とくに寒くなる2万年前ころになると、知らない人にとってはただの石のかけらが、黒いガラスのかけらのような、小さな石器が作られるようになりました。

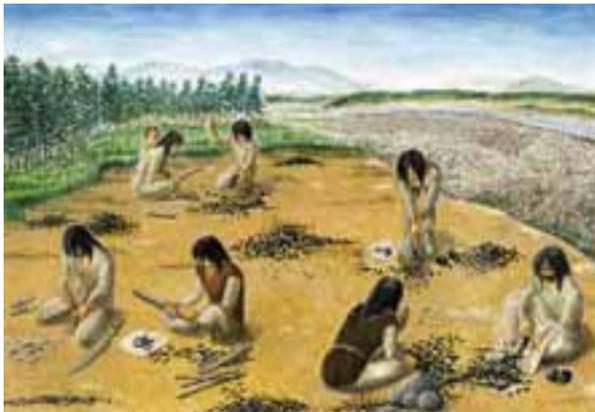
はばが数mm~1cmくらい、長さが数cmで、カッターナイフの刃のような形をしています。

この石器は「細石刃」とよばれています。

細石刃は、角や骨で作られたじくに、いくつもうめこむことで、ヤリの先や、ナイフとして使われました。

もし、どれかの細石刃が欠けたりこわれたりしても、そこだけを替え刃のようにつけかえることができる、すぐれものでした。

細石刃は、日本列島・シベリア・モンゴル・中国北部・カムチャツカ半島など、東アジアの広い範囲で使われました(大陸では3万年以上前から)。



約1万6千年前の暁遺跡(帯広市)の想像図。右おくが十勝川。
(想像図: 帯広百年記念館蔵)

川ぞいの高台で作られた細石刃

およそ1万6千年前、今の帯広市西8条南12丁目、聖公会幼稚園周辺の高台では、細石刃がさかんに作られていました(暁遺跡)。

この高台と鈴蘭公園(音更町)の高台の間は、当時、十勝川の氾濫原でした。十勝川とその支流が、曲がりくねり何本にも枝分かれをして流れていたのです。

暁遺跡のすぐ下にも、十勝川の支流が流れていました。

(氾濫原 p46)

材料には白滝の黒曜石がよく使われた

細石刃を作るためには、黒曜石の中でも、とくに質の良いものが使われていました。

大型で、ていねいな加工をするものは、白滝(遠軽町)産の黒曜石から作られました。ほかの石器には、十勝三股(上土幌町)産や置戸産の黒曜石も使われていました。(十勝三股の黒曜石 p33)

白滝は十勝から見て北にあり、暁遺跡から直線距離で100km以上あります。途中に、石狩山地もあります。

当時はもちろん、今のような道路はなく、基本的には川や川ぞいを「道」として使っていました。

また、上土幌町の旧石器時代の遺跡からも、白滝産の黒曜石でできた石器が見つかっています。地図を広げて、どんなルートを使っていたか考えてみましょう。



白滝(遠軽町)にある黒曜石の巨大な岩。白滝は、暁遺跡(帯広市)から北へ100km以上行ったところにある。
(写真: 北澤実氏)

1 細石刃(さいせきじん): 細石刃文化は、大陸から日本列島に伝わった。伝わるルートとしては、当時大陸と陸続きだったサハリン・北海道から津軽海峡をこえて本州に伝わるルートと、朝鮮半島から海をわたって九州や本州(四国をふくめて一つの島)に伝

わるルートとがある。千歳市柏台遺跡では恵庭火灰よりの下の地層で、細石刃石器群が確認された。たき火のあとの炭素で測定したところ、約2万年前の、国内最古の細石刃石器群であることがわかった。

さいせきじん
細石刃を作る「工場」... 帯広市の「暁遺跡」

「暁遺跡」(帯広市西8・9条南12・13丁目)では、旧石器時代の遺跡と縄文時代の遺跡(p90)が見つかっています。

遺跡の東部分が、およそ1万6千年前の旧石器時代の遺跡で、細石刃が8,000点以上、細石刃核(下参照)が50点見つかり、ほかに削器(切ったりけずったりするための道具)や彫器(彫刻刀のような刃をもつ道具)など、多くの石器が出てきました。

これほどの細石刃が見つかったということから、この場所は、細石刃を作るための場所、いわば「工場」だったと考えられています。

暁遺跡の石器は、帯広百年記念館などで見ることができます。

旧石器時代だけでなく、縄文時代の遺跡も見ついているということは、この場所が時をこえて「いい場所」だということなのかも知れません。

細石刃が見つかる遺跡としては、上土幌町の糠平湖岸遺跡、帯広市の南町2遺跡・上似平遺跡・空港南A遺跡などがあります。



暁遺跡(帯広市)の発掘。昭和59年(1984)。

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)



暁遺跡の位置。

帯広市西8・9条南12・13丁目。



暁遺跡のある高台。

約1万6千年前に段丘となった「上札内b面」(2)(p54)。

さいせきじん
細石刃の作り方... 観察のポイント



石のかたまりを打ち欠いて整形する。長い平らな面を作る(細石刃核)。



じくに取りつける



平らな面に角や骨をおし当て、細石刃をはぎ取る。



できた細石刃は、骨や角でできたじくに、いくつもうめこんで使う。

(『120年より前の帯広』、『十勝川の川舟文化史 濤標』より、改変)

さいせきじん
細石刃の作り方は、次の通りです(石器の作り方p75)。

石のかたまりを打ち欠き、形を整える
かたほうの長いふちを打ちぬいて、平らな面をつくる
角や骨を平らな面におし当てて、細石刃をはぎとる

石器を作るとき、作りやすく形を整えた石を「石核」といい、その作業でできる、細石刃を作るための石核は「細石刃核」といいます。

ハンターたちは、できた細石刃核を持ち運び、狩りで細石刃がこわれると、その場で作って取りかえたようです。



さいせきじんかく
細石刃核。ハンターたちはこれを持ち運んで石器を作った。(帯広百年記念館: 3)

2 聖公会幼稚園のある高台(せいこうかいようちえんのあるたかだい): この場所に段差ができ高台(段丘面: 上札内 b面)となったのは、約1万6千年前のこと(p54)。若葉の森遺跡や川西C遺跡に人がいた2万年以上前には高台ではなく、ここも十

勝川の氾濫原(はんらんげん)だった。
3 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

島になっていく北海道と人々の暮らし

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

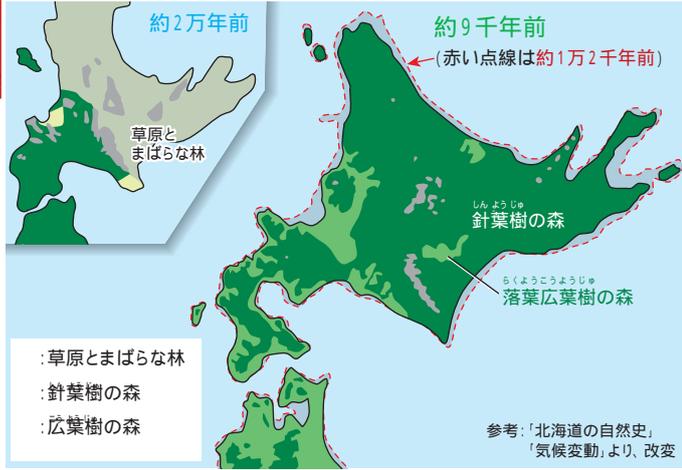
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



最も寒さがきびしかった1万8千年前ころを過ぎると、地球は暖かくなってきていました。ただし、スムーズに暖かくなったわけではなく、何度も寒さがぶり返しました。

暖かくなるにつれ、日高山脈をはじめ、地球上の氷河がとけ出しました。とけた水が海に流れこみ、海面が高くなり、低い土地が海底にすんでいきます。

およそ1万2千年前には、北海道とサハリンが海によって切りはなされ、北海道は島になりました。(p64)

また、暖かくなるにつれ、だんだんと森林が広がっていきました。トドマツやエゾマツの仲間など針葉樹の森です。

約1万2千年前になると、北海道はサハリンと分かれ島になった。暖かくなるにつれ、十勝にも針葉樹(トドマツなど)の森が広がっていた。約9千年前になると、落葉広葉樹(ミズナラなど)の森も広がりはじめた(縄文時代 p84)。



針葉樹の林(東ヌブカウシヌプリ:鹿追町)。ただし、とても若い林。

消えていく「細石刃」

一方では、マンモスやバイソン(野牛: p72)など、北からやって来た大型の動物が減っていきました。

替え刃式の石器「細石刃(p78)」も、それに合わせるようにして作られなくなっていきます。

細石刃は、角などのじくにくんで使うため、あまり小さなヤリ先が作れません。大型の動物がいなくなり、小さくすばしっこい動物を相手にするためには、使いにくくなったのかも知れません。



細石刃。

つなぎやすいヤリの先「有舌尖頭器」

1万4千年前ころから、「有舌尖頭器」というヤリ先の石器が作られるようになりました。木製の柄につなぐところが細工してあって、石器の下が飛び出した形(突起)になっています。

この突起が「あっかんべエ」をしたときの「舌」のように見えることから、「有舌尖頭器(舌のような突起が有る尖った頭の石器、という意味)」と名づけられています。

また、刃をみがいて(といで)作った「石おの」も使われるようになります。森林が広がったことで、木々を切り開く必要が大きくなったためでしょうか。



石おの(札内N遺跡)。



札内N遺跡(幕別町)で見つかった有舌尖頭器。それぞれの石器の下に飛び出したところ(赤丸の部分など)が「舌」。有舌尖頭器はヤリ先として使われた。(写真:2枚とも幕別町教育委員会蔵)

1 針葉樹(しんようじゆ): 葉が針のように細長いマツやスギなどの樹木のこと。温帯北部から冷帯を中心に分布している。分類としては裸子植物門・球果植物綱に入る。

うつ か きゅうせつ き おおぞら い せき さつないエヌ い せき
移り変わっていく旧石器の文化 ... 大空遺跡から札内N遺跡へ

およそ1万6千年前の「**曉遺跡（帯広市）**」からは、**細石刃核（細石刃をけずり出す前の石器）**は見つかりましたが、**有舌尖頭器**は見つかりませんでした（ p79）。

それよりあとの「**大空遺跡（帯広市）**」からは、**細石刃核**と、**有舌尖頭器**が**いっしょ**に見つかりました。

およそ1万3千年前の「**札内N遺跡（幕別町字依田）**」では、**大小の有舌尖頭器**はありましたが、**細石刃**は見つかりません。

細石刃を使う文化から、**有舌尖頭器**を使う文化へ移る間に、**両方とも使う文化**があったようです。

大空遺跡の旧石器は**帯広百年記念館**で、また**札内N遺跡**の旧石器は**幕別町ふるさと館**で見ることができます。



大空遺跡(帯広市)では、**細石刃核(左)**と**有舌尖頭器(右)**が**いっしょ**に見つかった。
 (写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)



大空遺跡(帯広市空港南町南10線・南の森西)と帯広百年記念館(帯広市緑ヶ丘2番地)の位置。



札内N遺跡の位置。幕別町字依田。



幕別町ふるさと館の位置。幕別町字依田384(依田公園横)。

炭や花粉でわかる木の種類 ... 昔の環境を知るために

木の種類によって、寒いところに生えるものもあれば、暖かいところに生えるものもあります。昔生えていた木の種類がわかれば、そのころの気候がわかります。

それでは、昔生えていた木の種類はどうやってわかるのでしょうか。

答えは、たき火のあとと花粉の化石です。

木もふくめて、ほとんどの生き物は死ぬとくさって(分解されて)土にかえります。

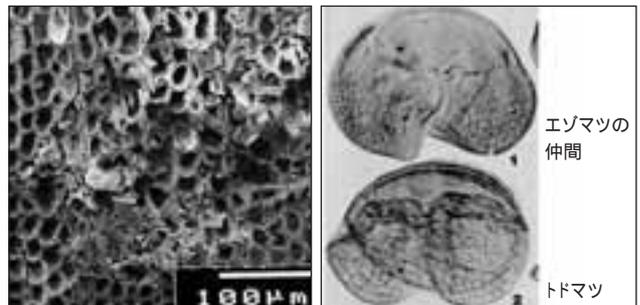
ところが、たき火に使われて炭になったものは、くさらずに残ります。およそ2万年以上前の**若葉の森遺跡**や**南町2遺跡（帯広市）**からは、**ハイマツ**（ p62）や**グイマツ**、**トドマツの仲間**や**エゾマツの仲間**の炭が見つかりため、このころがとても寒かったことがわかります。

また、多くの花粉は、中身がくさっても外側の膜がとてもくさりにくいで、長い間（数千万年も）残り化石となります。この膜の形を調べることで、どんな種類の植物が

生えていたかがわかります。(化石 p21)

とくにしめったところでは、ものがくさりにくくなります。そこで、**湿原の土**である**泥炭**に長いつつをねじこんで、土ごとそのつつをひきあげる「**ボーリング調査**」をすると、上から新しい順番に昔の花粉を見つけることができます。

それによって、その湿原周辺の昔の自然環境が、順々にわかっていくのです。



若葉の森遺跡(帯広市)で見つかったエゾマツ類の炭。(3) 曉遺跡(帯広市)で見つかった花粉。(350倍)

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんがいせいせんたー）：帯広市西23条南4丁目26・8 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

3 μm（マイクロメートル）：長さの単位で、1mmの千分の1。

ひとつの遺跡にある長い歴史 ... 川西C遺跡の場合



川西C遺跡の位置。帯広市西15条南40丁目。

川西C遺跡は、帯広市西15条南40丁目、稲田小学校の周りにある遺跡です。

この場所は、およそ4万5千年前から札内川がけずり残していった段丘の上です（p54）。すぐ北側では、八千代（帯広市）から流れてきた売買川が段丘の角をけずり落とすように流れ落ち、札内川に向かっていきます。

この遺跡では、76ページにあるように、およそ2万1千年前の石器や顔料のもとなどが見つかっています。旧石器時代のキャンプ生活の中でも、どちらかというくと長くとどまって、狩りの準備などをする「ベースキャンプ」だったと考えられています。（/）



川西C遺跡の発掘調査。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：1）

しかし、ここを人が利用したのは、その時だけではありません。

およそ1万3千年前、まだ氷期（p52）ではありますが少しづつ暖かくなってきたころ、ここに再び人がやって来て石器を作り、たき火をしていました。

続いて、およそ8千年前、今とほとんど同じ暖かさになったころ、今度は石器を使う人々がここで暮らしていました。すでに縄文の文化（p84）になってい

ました。縄文時代のものとしては、ほかにおよそ6千5百

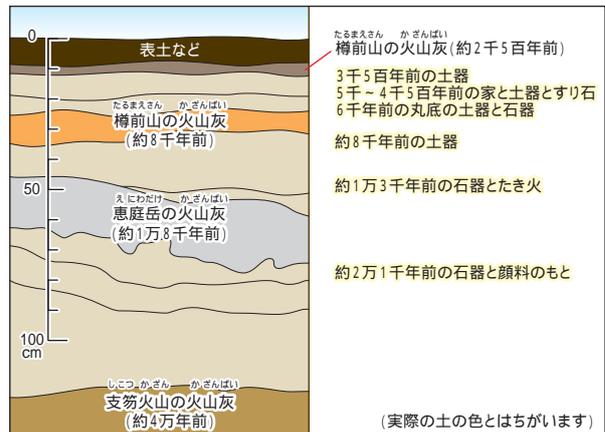


川西C遺跡に人がいたことがわかっている時。くり返し人がやってきている。

年前の土器が大量に見つかり、さらに6千年前の丸底の土器と石器、5千~4千5百年前の小さな住居あとと土器やすり石、3千5百年前の土器が見つかっています。最も古い時からすでに1万7千年（以上）たっていたころです。さらに、共栄通をはさんで西側にも「稲田1遺跡」があり、ここでも旧石器時代と縄文時代の遺跡が見つかっています（p92）。

いい方を変えれば、稲田小学校のあたりは、1万7千年の時をこえて、たびたび人がやって来ていた場所なのです。川西C遺跡だけでなく、多くの遺跡が同じようにたびたび使われています。

ただし、ずっと絶え間なく人がいたわけではありません。ある時期人がいなくなって、数百年たってから、別の文化を持った集団がやって来る、ということがくり返されているのです。



川西C遺跡の地層イメージと見つかったものの年代。

それよりあとはどうでしょうか。縄文時代に続く縄文時代（p100）や擦文時代（p102）、開拓期のアイヌ文化期においては、狩りや植物採集などをするための生活空間（イオル p150）として利用されたでしょうし、あるいは集落がつくられたことがあったかも知れませんが、その遺跡は残っていません。

それではおよそ3千5百年前を最後に、人が住みついていた証拠はないのでしょうか？ いえいえ、その3千5百年後、また多くの人々がもっと広い範囲に広がって住みついています。たくさんの方が集まる巨大な建物

も建てられました。そう、今の住宅地と稲田小学校です。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

十勝縄文の始まり？ それとも... 大正3遺跡



発掘中の大正3遺跡。ここを流れていた川が、流れにそってつった「もり上がり(自然堤防：2)」の上にあった。今は自動車道の下。

発掘調査の時、土器のかけらが、ふつう縄文のものが
出る地層より下の地層から見つかりました。
調査をしていた山原学芸員(帯広百年記念館埋蔵文化
財センター)は、これを見ると、
「この文様(もよう)は、新潟県の小瀬ヶ沢洞窟遺跡
のものに似ている」と思ったそうです。小瀬ヶ沢の土
器は、縄文時代の始まりころ(草創期)のものでした。

この土器のかけらには、ほかにも表面をつめや道具
でさしたりつまんだりしてつけたもようがあるなど、
縄文時代初めの持ちようを持った土器であることが確
かめられました。



大正3遺跡で見つかった石器。左上がヤジリ(矢の先)。左下内
内はその後の縄文時代のヤジリ。



(上)自動車道完成後。

(右)大正3遺跡の位置。
帯広市大正町東3線。

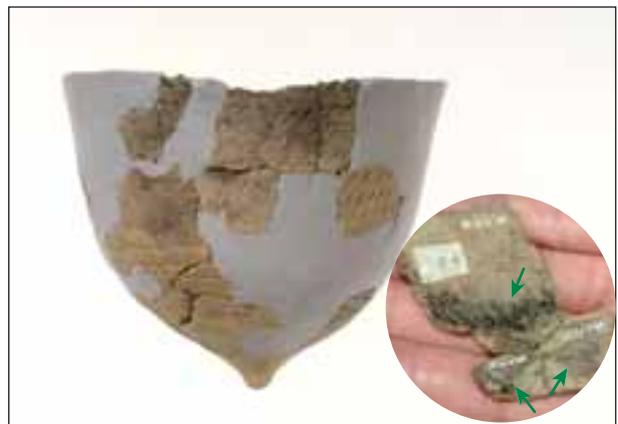


「土器」は、粘土を形にし火で焼いて作る器です。
土器が現れることで、「縄文の文化」が始まります。

本州では、およそ1万3千年前の土器が見つかって
いて、ここから「縄文時代」が始まるとされています
が、北海道ではずっとおくれで、9千年前ころから土
器が使われだしたと考えられていました。

しかし、平成15年(2004)帯広・広尾自動車道の
工事前に発掘調査された「大正3遺跡(帯広市大正町)」
から、およそ1万2千年前の土器が見つかりました。

まさに、北海道の歴史を書きかえる、大発見だった
のです。



復元された土器。円内は土器についていた「おこげ」(矢印)。

さらに、見つかった土器は料理に使われたようで、
「おこげ」がついていました。おこげにある「炭素」
を調べることで、いつの時代のものかわかります。

その結果、「おこげ」は1万2千年くらい前のもの
だったことがわかったのです。(p70)

こうして、大正3遺跡から見つかった土器は、北海
道最古のもので、本州で縄文時代が始まってまもなく
のものであると確かめられました。

ただ、これが十勝(そして北海道)の縄文時代の始
まりだとすると、なぞも残ります。

このあと、約3千年の間、土器が見つかっていない
こと。3千年後の縄文の土器や石器と、ちがいが大き
いこと。ヤジリ(矢の先)の石器も見つかっているが、
本州のもの(▲)とちがって、◆形であること、など、
わからないことが多いです。

一度、暖かくなった時に、土器を持った人たちが北
海道にわたってきたのだけれど、およそ1万2千年前
にあった「寒のもどり(寒さがもどった時期)」に、い
なくなったのかも知れません。

(写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

2. 自然堤防(しぜんていぼう)：自然のままの川にそってできるより少し高い土地。洪水が起きた時、あふれた川の水が土砂を堆積(たいせき：積み重ねること)していくことができる。 1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねん

かんまいぞうぶんかざいセンター)：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん